

集団同一視が自己評価基準や自己説明に及ぼす影響

赤 須 大 典¹⁾
木 藤 恒 夫²⁾

要 約

本研究では、集団成員イメージの評価と個人の自己評価との関連（質問紙1）、自己説明と集団同一視の程度との関連（質問紙2）を検討した。大学生と専門学校生 285 名を対象に、質問紙1では、価値判断を伴う9項目の性格特性に関する形容詞対（価値形容詞対）、価値判断を伴わない4項目の形容詞対（非価値形容詞対）を用いて、好ましい（あるいは好ましくない）成員イメージ評価、及び自己評価を測定した。質問紙2では、3因子12項目の集団同一視尺度（Karasawa, 1991）と、自己を説明する上で所属集団の効果（役割）を問う「現在のあなた自身を説明する上で、今〇〇という集団に所属していることが、どのくらい重要だといえますか？」という質問に対する回答を求めた。その結果、価値形容詞対では自己評価と好ましい成員イメージ評価との間に6項目で正の相関が、好ましくない成員イメージ評価との間でも5項目で負の相関が認められた。非価値形容詞対でも自己評価と好ましい成員イメージ評価との間の全項目で正の相関、好ましくない成員イメージ評価では一部の項目で負の相関がみられ、自己評価の基準を集団の成員イメージ評価へ準拠させることが示唆された。また自己説明における所属集団の効果の得点を高低群にわけて集団同一視の得点差を検討したところ、集団同一視に含まれる全ての因子において高群の集団同一視得点が高かった。さらに回帰分析で調べたところ、特に集団同一視尺度における所属集団への直接的な愛着を示す因子に強い影響を与えていたことが判明した。

キーワード：成員イメージ評価 自己評価 集団同一視 自己説明

問 題

個人が集団に所属する理由には、その集団で行われている活動と自分の興味が一致している、好感をもっている人物が所属しているなど、さまざまな動機づけに関わるものがあげられる。もしこのような動機づけである特定の集団に所属した場合でも、当初の動機づけが低減されることもあり、そうでない場合もある。その結果、個人は所属した集団に対して高いプライドを持つようになることもあり、一方では集団から離脱することもある。前者の場合には、個人が集団成員として所属集団のもつアイデンティティを獲得し、行動

や態度においてその集団成員としての自覚を持つようになる（Tajfel & Turner, 1979）。この集団アイデンティティを獲得する過程が集団同一視と呼ばれるものである。その集団での活動が以前よりも好きになった、所属集団により高いプライドを持つようになったなど、集団アイデンティティの受容が拡大することは、集団同一視の高まりも意味する。

集団同一視は成員と集団の関わり方において変化する。成員が集団にかかわる動機づけはさまざまであり、集団同一視の変化を促す理由も同じく多様である。どのような動機づけを取り上げるかによって成員と集団の関わり方は異なり、集団同一視の変化も異なるだ

1) 久留米大学比較文化研究所
2) 久留米大学文学部心理学科

ろう。集団成員の集団に対する同一視の程度を規定する要因は何なのか。

垂澤・広瀬（2006）は、集団で取り組む実験の回数を経るごとに、成員の所属集団への自尊心や愛着が高まることを報告した。これに基づき赤須・木藤（2009）は、所属集団に対する集団同一視の変化について、集団に所属している期間の長さが所属集団に対する同一視の強さに及ぼす影響を検討した。心理学科の1年生から3年生の大学生を調査対象者とし、学年間での集団同一視の違いを調べた。しかしその結果は、所属期間に応じて集団同一視が強まるという当初の予想とは必ずしも一致しなかった。赤須・木藤（2009）は集団への所属期間が長くなることで、所属集団との相互作用が増し、単純接触効果（Zajonc, 1968）のような集団への愛着が増大して集団同一視が高まると予想していた。所属期間の長さは、成員が集団に所属する動機づけを強化（あるいは低減）させるひとつの要因ではあろう。しかし実際に個人が集団に所属している背景には、集団同一視の変化にかかわるさまざまな動機づけも同時に存在する。そのため、上述のように集団同一視の変化が予想とは異なってしまったと考えられる。

集団同一視が高まるにつれ、個人は自らを集団に同化させるようになる。ここに、個人が集団に所属することのひとつの意味があると考えられる。Turner, Hogg, Oaks, Reicher, & Wetherell（1987）は、個人は集団へ所属することで自らを集団成員のステレオタイプへと近づけ、その成員の行動に類した行動をとるようになる」と述べている。このことから考えると、所属集団においてはステレオタイプの成員の行動規範が個人の行動における準拠枠になる可能性が予想される。個人が自分自身で自らの行動や態度を評価する基準を客観的に設定することは難しい。しかし、集団成員の一員として評価するならば、集団から得られる社会的アイデンティティが個人の行動や態度の指針となり、それが同時に自分の行動や態度を評価する時の比較的に客観的な準拠情報になり得る。また遠藤（1993）は、理想自己と現実自己の認識に関する研究ではあるが、個人が重要視している性格的な特性に関して、こうありたい（またはありたくない）という理想自己への評価が現実自己の評価の準拠情報となると報告している。この遠藤の報告を個人と所属集団との関係枠に組み込むと、自己評価の準拠情報を得るための手段のひとつが、ステレオタイプの成員の評価基準を自らの評価基準に適用することであると考えられる。

集団成員は自己評価のための準拠情報をより強く与

えてくれる集団に対してより高い同一視を抱くことが予想される。赤須（2009）は大学の3年生と4年生を調査対象者にして、彼らが同時期に所属している学科とゼミという2つの集団に対する集団同一視の程度の違いを測定した。その結果は、3年生よりも4年生の方が学科よりもゼミに対して高い集団同一視を示した。3年生も4年生もゼミに所属しているが、4年生の場合はゼミにおける卒業論文の作成が集団活動の中心となる。卒業論文は卒業に関わる重大な活動であり、ゼミが4年生にとっては重要な集団となっていたとみなされる。このことがゼミに対する高い集団同一視を示す結果に結びついたのであろう。

Turner（1987）は、個人の意識に上りやすい所属集団の規定因として、集団の顕現性という概念を用いている。この顕現性とは、ある集団が他の集団と比べて利用されやすいかという相対的接近可能性と、その集団が本人の置かれている状況にどのくらい心理的に合致するかを示す適合性の2つの要素で構成される。顕現性が高い集団は成員にとって、置かれた状況においてより意識に上りやすい集団といえる。したがって、顕現性の高い集団とは自己説明において効果の高い集団と考えることができる。

自己説明における所属集団の効果を示す研究として Jetten, Hogg, & Mullin（2000）がある。Jettenらは、集団への所属と不確定性の低減との関連に着目し、所属集団と自己を同一視することが社会的文脈において自分を意味づけるため、不確定性の高い状態を回避できると述べている。人間にとって周りの世界を意味あるものとして認識あるいは予測できることは重要である。自分自身および他の人々に対する主観的な態度、信念、気持ち、知覚における不確定性が高い状態は、不安や嫌悪を引き起こす原因となる。個人の自己説明において、「私は〇〇という集団の一員である」というフレーズが大きな働きを持つならば、〇〇という集団の一員として、自分自身を意味あるものとしてみなすことができるだろう。そのため、このような集団に対する同一視は高くなるのが考えられる。

本研究では、成員自身の自己評価と所属集団におけるステレオタイプの成員のイメージに対する評価を比較することにより、ステレオタイプの成員の評価が自己評価に対する準拠情報になっているか否かを検討する。また、所属集団が成員の自己説明におけるひとつの大きな要素となる場合には、その成員の集団同一視の程度は高くなるという仮説を検討する。

方 法

調査対象者 大学生と看護学校生の男女計 285 名。内訳は、K 大学社会福祉学科 96 名、心理学科 1 年生 54 名と 2 年生 56 名、看護学校生 79 名。

質問紙と調査手続き 実施した質問紙は 2 種類。質問紙 1 では、所属している集団における成員として好ましい（あるいは好ましくない）学生をイメージさせ、性格特性に関連する 13 個の形容詞対がそれらの成員イメージにどの程度あてはまるかを評定させた。13 項目のうち、9 項目は（意欲的な - 無気力な）のように正負の価値判断を含む形容詞対「価値形容詞対」、4 項目は（冷静な - 情熱的な）など必ずしも正負の価値判断を含まない形容詞対「非価値形容詞対」であった。また、同様の形容詞対を用いて調査対象者自身についての自己評価を行わせた。

質問紙 2 では Karasawa (1991) の日本語版集団同一視尺度（12 項目版）を用いて、調査対象者の所属集団に対する集団同一視の程度を回答させた。なお集団同一視尺度における所属集団名の部分は各調査対象者が所属する集団名を表記させて行った。さらに自己説明において所属集団がどの程度の効果を持つかを問うオリジナルの質問（以下、効果質問）、「現在のあなた自身を説明する上で、今〇〇という集団に所属していることが、どのくらい重要だといえますか？」に回答させた。

質問紙 1 と質問紙 2 はすべて、1（全くあてはまらない）から 7（非常に良くあてはまる）までの 7 件法で評定させた。調査は 2009 年の 9 月上旬から 10 月上旬にかけて実施した。調査対象者それぞれの講義時間を利用して調査用紙を配布し、その場で回答を行わせた。また、各調査対象者に対して集団成員としての意識を明確にさせるために、質問紙の番号を入れ替えて教示

し、質問紙 2、質問紙 1 の順番で回答させた。

結 果

まず、集団同一視尺度の 12 項目を 3 つの因子に分けた。Karasawa (1991) にしたがって、集団に対する直接的な愛着を測るグループ因子、所属集団の他の成員に対するコミットメントについて尋ねたメンバー因子の 2 つの因子のほか、集団成員としての自己意識について尋ねた 2 つの項目（Karasawa, 1991 での項目 1 と項目 2）を成員性意識因子とした。

成員イメージ評価と自己評価の関連

所属集団における成員イメージ評価と自己評価の関連を調べるため、自己評価と成員イメージ評価の間の相関を求めた。その結果、価値形容詞対においては、自己評価と好ましい成員イメージ評価との間に 6 つの形容詞対で正の相関が見られた。同じく自己評価と好ましくない成員イメージ評価との間に 5 項目で負の相関が見られた（表 1）。

また、好ましい成員イメージ評価と好ましくない成員イメージ評価、自己評価の得点差を 1 要因の分散分析を用いて検定したところ、評価得点において主効果がみられた ($F(2,568)=895.37, p < .01$)。多重比較の結果、好ましい成員イメージ評価と自己評価、自己評価と好ましくない成員イメージ評価における平均値の差は 1% で有意であった（図 1）。好ましい成員イメージ評価は自己評価よりも有意に高く、好ましくない成員イメージ評価は自己評価よりも有意に低く評価されていた。集団の成員イメージ評価は自己評価と相関があり、さらに好ましい成員イメージ評価は自己評価よりも高く、好ましくない成員イメージ評価は低いという結果から、成員イメージ評価は自己評価に対して集団における準拠枠として機能していることが示唆される。

表 1 価値形容詞対における成員イメージ評価と自己評価との相関

価値形容詞対			好ましい成員	好ましくない成員
感じの悪い	—	感じのよい	0.230 ***	-0.157 **
にくらしい	—	かわいらしい	0.256 ***	-0.231 ***
不親切な	—	親切的な	0.229 ***	-0.053
無気力な	—	意欲的	0.247 ***	-0.113
積極的な	—	消極的な	0.219 ***	-0.083
自信のない	—	自信のある	0.143 *	-0.115
堂々とした	—	卑屈な	0.061	-0.136 *
軽率な	—	慎重な	0.106	-0.171 **
重厚な	—	軽薄な	0.101	-0.161 **
		自己評価		

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

非価値形容詞対においても価値形容詞対の場合と同様に自己評価と成員イメージ評価との相関を求めた(表2)。

非価値形容詞対における全ての項目で、自己評価と好ましい成員イメージ評価との間に正の相関が見られた。自己評価と好ましくない成員イメージ評価との間には2項目において負の相関が見られた。これらの結果から、非価値形容詞対においても成員の自己評価は所属集団の成員イメージ評価に関連していることが示唆される。集団成員の自己評価は、正負の価値を伴わない性格特性の評価においてもステレオタイプ的な成員の評価に影響を受けているといえよう。

自己説明における所属集団の効果が集団同一視にもたらす影響

集団成員への評価と自己評価との間の関連性は、成員の自己説明に対して所属集団が高い効果を持つ場合により顕著になることが予想される。そのような認識がある場合、所属集団に対する集団同一視も高まるだろう。ここでは成員の自己説明における所属集団の効果が集団同一視に影響を与えるかを検討する。

効果質問の得点が4より大きいものを効果質問の高得点群、4点以下のものを低得点群として2群にわけた。集団同一視に含まれる成員性意識因子、グループ因子、メンバー因子のそれぞれにおいて、集団同一視得点について効果質問の高得点群と低得点群の間でt検定を行った(図2)。

集団同一視のいずれの因子においても、効果質問の

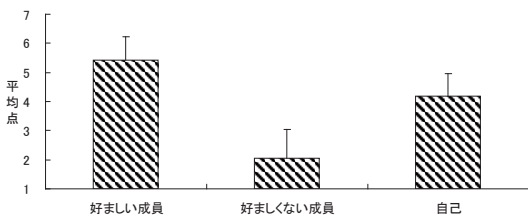


図1 価値形容詞対における成員イメージ評価と自己評価の得点(n=285)

高得点群の集団同一視得点は低得点群より有意に高いという結果が得られた。順に自己意識因子 ($t(283)=5.44, p<.01$), グループ因子 ($t(283)=10.87, p<.01$), メンバー因子 ($t(283)=6.05, p<.01$)。この結果から、集団同一視のすべての因子において、成員にとって自己説明における効果が高い集団に対して高い集団同一視を抱くことが明らかになった。

さらに集団同一視に対する効果質問の影響を詳細に検討するため、効果質問の点数を独立変数として、集団同一視に含まれる各因子に対してステップワイズ法による回帰分析を行った(図3)。

回帰分析の結果、効果質問の得点が高くなると場合には、集団同一視の全ての因子において集団同一視の程度も高くなることが明らかになった。また集団同一視の3因子の中でも、グループ因子に対する効果質問の影響が最も大きくなった。

考 察

本研究では、集団に所属することで集団のステレオタイプ的な成員への評価から自己評価がうける影響について検討した。集団のステレオタイプ的な成員の評価といえる好ましい成員イメージ評価と自己評価、好ましくない成員イメージ評価と自己評価との間で多くの形容詞対において相関が見られた。これらの結果から、集団へ所属することで、集団のステレオタイプ的な成員への評価が自己評価の準拠枠として認識されることが示唆された。このことは、集団に所属する行為

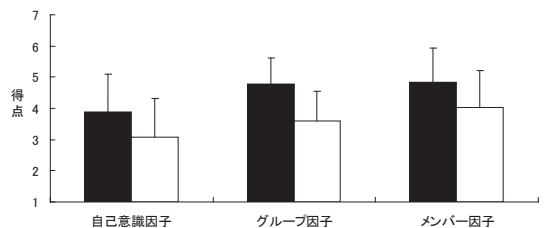
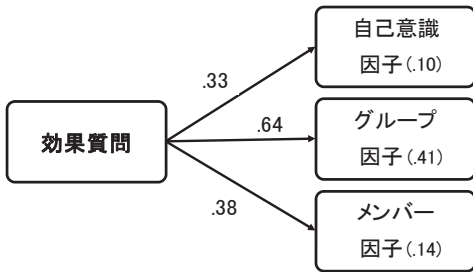


図2 効果質問の高・低群間における集団同一視各因子の得点差。黒ベタは効果質問高得点群(n=171)、白ヌキは低得点群(n=114)。

表2 非価値形容詞対における成員イメージ評価と自己評価との相関

非価値形容詞対		好ましい成員	好ましくない成員
冷静な	— 情熱的な	自己評価 0.329 ***	-0.229 ***
外交的な	— 内向的な	自己評価 0.120 *	0.027
厳しい	— やさしい	自己評価 0.183 ***	-0.050
にぎやかな	— もの静かな	自己評価 0.256 ***	-0.152 *

*p<.05 ***p<.001



注) 数値は標準偏回帰係数, カッコ内は決定係数を示す (1%水準で有意)

図3 効果質問と集団同一視

の持つ意味のひとつが、自己評価の基準を得ることであるという予想が支持されたといえよう。

価値形容詞対を用いた分析では自己評価は好ましい成員イメージ評価との間に9項目中6項目で正の相関が見られ、好ましくない成員イメージ評価との間には5項目において負の相関が見られた。また自己評価と好ましい成員イメージ評価との間に相関がなかった3項目についても、好ましくない成員イメージ評価との間で相関が見られた。この結果から、ステレオタイプの成員への評価は価値判断において正負いずれかの面で自己評価の基準となっていることが考えられる。非価値形容詞対でもすべての項目で自己評価と好ましい成員評価との間に正の相関が見られた。このことから、価値形容詞対における結果で集団成員イメージ評価と自己評価が、人として好ましい性質への評価という方向で一致したことによるものではなく、集団に所属することで集団の典型的な成員像に自己を近づける集団同一視の過程 (Turner et al, 1987) によるものであることが明らかとなった。また本研究で使用した価値形容詞対、非価値形容詞対はいずれも、ランダムに選定した形容詞対である。そのため本研究における成員評価や自己評価は、集団の持つ特有の性質や、成員個人の動機づけに関わるような内容を尋ねているものではない。したがって成員の評価を自己評価の基準とする行為は、集団の具体的な性質と関わりなく発生することが示唆された。この結果は、集団に所属するだけで自己を集団成員としてみなすようになるという最小条件集団研究 (Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971) の知見とも一致する。

遠藤 (1993) は現実自己とそうなりたいと願う理想自己、現実自己となりたくない理想自己との間にそれぞれ正と負の相関を見出している。また理想自己は個

人にとっての準拠枠となると結論づけている。集団場面において、好ましい成員イメージは成員としてこうありたいと願う正の理想自己、好ましくない成員イメージはこうありたくないという負の理想自己に対応すると解釈できる。この点からも集団における成員イメージは個人にとって所属集団の成員としての準拠枠として機能していることがいえる。

自己説明における所属集団の効果が集団同一視にもたらす影響においては、集団の効果が高いと感じている成員は、所属集団に対する集団同一視も高かった。つまり所属集団が成員にとって自己を説明できる度合いが高い集団ならば、成員はより強く所属集団へと自己を同一視することがいえる。このことから自己説明における所属集団の効果は、集団同一視の変化に影響を及ぼす要因として機能していることが明らかになった。また自己説明への効果が集団同一視の3つの因子に与えている影響は、集団そのものに対する愛着を示すグループ因子に対して最も強かった。すなわち所属集団がもつ自己説明における効果は、集団同一視の中でも特に、所属集団に対する直接的な愛着に対して大きな効果をもたらしていることが示唆される。集団に同一視する効果の一つに自己評価の高揚 (Hogg, 1992) がある。集団所属の場面で個人は自らを集団と同一視している。そのため所属集団自体や所属集団成員への評価が高揚することは自己の評価の高揚にもつながる。本研究の結果をこの動機的側面から考えると、自己説明への効果が高い集団は、成員の自己評価により明確な基準を与えてくれる集団となる。つまり自己説明として効果が高い場合に、所属集団の評価の高揚は成員にとってより身近な実感として捉えることができ、それに伴う自己高揚もよりリアリティのあるものとして感じられる。成員はそのような集団により強い同一視を感じることができる。そして自己説明における効果は集団成員にとっての準拠枠の意識を高めるといふ役割を果たしていることが考えられる。集団に所属し自己を集団成員に同一視する過程が成員にとっての準拠枠の形成となる。そして所属集団を自己説明としてより効果が高い集団と認識すれば、成員は所属集団をより明確な準拠枠の源泉として高い同一視を持つようになるだろう。

引用文献

赤須大典 2009 内集団のみ条件下での集団成員の所属期間と所属集団の顕現性の違いが集団同一視に及ぼす影響 久留米大学大学院心理学研究科後期博士

- 課程中間論文 (未刊行)
- 赤須大典・木藤恒夫 2009 集団同一視の経時変化と内集団成員イメージの評価 久留米大学心理学研究, **8**, 45-52.
- 遠藤由美 1993 自己認知における理想自己の効果 心理学研究, **64**, 4, 271-278.
- Hogg, M. A. 1992 *The Social Psychology of Group Cohesiveness-From Attraction to Social Identity*, London, Harvester Wheatsheaf.
(ホッグ M.A. 廣田君美 藤澤等 (監訳) (1994) 集団凝集性の社会心理学 北大路書房)
- Jettin, J., Hogg, M. A., Mullin, B.-A. 2000 In-Group Variability and Motivation to Reduce Subjective Uncertainty. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, **4**, 184-198.
- Karasawa, M. 1991 Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 293-307.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. 1971 Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.
- Tajfel, H. & Turner, J.C. 1979 An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin and S. Worchel (Eds), *The Social Psychology of Intergroup Relations* (pp. 33-47), Monterey, CA: Books-Cole.
- 垂澤由美子・広瀬幸雄 2006 集団成員の流動性が劣位集団における内集団共同行為と成員のアイデンティティに及ぼす影響 社会心理学研究, **22**, 12-18.
- Turner, J.C., Hogg, M.A., Oaks, P.J., Richer. S.D., & Wetherell, M. S. 1987 Rediscovering the social group. *Rediscovering the social group: A Self-Categorization Theory*. Oxford: Basil Blackwell. Pp. 153-185.
(蘭 千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳) 1995 社会集団の再発見—自己カテゴリー化理論—誠信書房)
- Zajonc, R. B. 1968 Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology (Monograph Suppl., Pt. 2)*, 1-29.

Influences of group identification on self-evaluation and self-introduction.

DAISUKE AKASU (*The Institute of Comparative Studies of International Cultures and Societies, Kurume University*)

TSUNEO KITO (*Department of Psychology, Kurume University*)

Abstract

We used two questionnaires to investigate influences of group identification on self-evaluation and self-introduction. Participants were 285 students of university and vocational school. In questionnaire 1, evaluation of group member's image as superior/inferior and self-evaluation were examined. All kinds of evaluation were performed by 13 items of adjective pair ; nine items with a value judgment and four items without a value judgment. There were significant positive correlations between evaluations of the superior group members' image and the self-evaluation in 6 items with value judgment and all items without value judgment. There were significant negative correlations between evaluations of the inferior group members' image and the self-evaluation in 5 items with value judgment and 2 items without value judgment. These results indicate that criterion for evaluation of group members' image became that of self-evaluation. In questionnaire 2, an effect of group on self-introduction and the degree of group identification were examined. The questionnaire consisted of 12 items for group identification (Karasawa, 1991) and of an original question for an effect of group on self-introduction. Participants who admitted their group was an available element for self-introduction showed high-level degree of the group identification than the others. A regression analysis also showed that the availability of group for self-introduction influenced the group factor in Karasawa's group identification scale.

Key words : evaluation of member's images, self-evaluations, group identification, self-introduction